

12時間働き、200個配る

コロナ禍と 資本主義

宅配の間(7)

2021年12月。クリスマスを前に控えたある日、吉配ドライバーの池原詩有紀(じゅうき)さん(28)の車に記者が同乗しました。配るのはもちろん、ネット通販大手アマゾンの荷物です。

朝7時50分。物流センターでは、積み込み作業を終えた軽バンが1台また1台と倉庫から出で行きます。30台ほどの駐車スペースはほぼ満車です。

配送ルート

配達車両ごとに積み込み作業の時間帯が決められています。池原さんの持ち時間は15分。車から積み降りるごとに、1便で配達する分の荷物を受け取りに走ります。右手にはかな隣間に小包をはじめ込みスマートフォン。アマゾンのます。

配送専用アプリ「アマゾンフレックス」を起動し、表示された配達先を入念にチェックします。頭の中で配送ルートを組み立て、配達順序を考えながら荷台を埋めなければなりません。時間指定が早い荷物は手前で、配達地域が違う荷物は奥へ。箱と箱のわすれを取りに走ります。右手にはかな隣間に小包をはじめ込みスマートフォン。アマゾンのインターホンを押してしまま

す。エレベーターがない建物では階段を全力疾走です。「よし次一」。車を数メートル走らせて止めて配達、また走らせて止め…。ハン

ンを切る腰がえりません。先が分からぬ。宅配ボック

スが満杯で商品を入れられない。時間が刻一刻と失われていでしょ」

第一便の配達を終えてようやく昼食を取ったのは午後2時半でした。大盛りのハンバ

月。荷さばきは手慣れてきました。当初は一日60個でさえ配りきれず、先輩の応援に頼っていました。今では平均2

00個をこなします。週5日、一日10時間以上走り回るところ、国家から焼き魚の番ばしい匂いが漂ってきました。

それでも予期しない事態は起ります。住所不備で配達先が分からぬ。宅配ボックスが満杯で商品を入れられない。時間が刻一刻と失われていでしょ」

第三便の配達を終えてようやく昼食を取ったのは午後2時半でした。大盛りのハンバ



荷台に載せた荷物の山から商品を探す池原さん

に止め、配達先の住所や氏名をアブリで確認して荷物を探達先に着きました。車を路肩に止めて、配達先の住所や氏名をアブリで確認して荷物を探します。

3分で一個以上配りないと終わらない計算です。午後から10分後。最初の配達先に着きました。車を路肩に止め、配達先の住所や氏名をアブリで確認して荷物を探します。

配達を終えたのは午後7時半。計100個もの荷物を配り終りました。家路についたのは午後8時です。

「家に帰つ着いのなつてもほもつ帰つてゐるよ」12時間以上走り続けた軽バンが、最後の荷物となった記者を降ろして、夜の街へ消えました。(つづ)